

自由の空

黑夜 銀華

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

冷たく響いた電子音。

機能することの無い心の臓。

開くはずのなかった瞼。

だが、それらは全てなかったことに。

前略、どこかの知らぬ誰か様。

私はどうやら、銀魂へ来たようです。

少しズレた少女が、銀魂へトリップした物語。

目次

第二空	9
第一空	1

第一空

風が頬を撫でていく。フワリと花の香りがして、鼻をスンと鳴らした。徐々に頭が覚醒していき、そのうちに水の音と匂いが五感を揺らす。手にカサカサと当たるのは草だろうか。チクチクと痛い気もするが、何故か火照った体には冷たい草と土が心地いい。瞼を見る目に映るのは黒。ということとは、今は夜。

そこまで考えて、ようやく瞼を押し上げた。ゆっくりと重い体を起こす。

最初に見えたのは、ぼんやりと光る三日月。雲の隙間から覗く星々は、キラキラと己の存在を主張しているよう。

空から地面へと目線を移す。目の前には砂利の河原、その奥には川が流れていて、私は土手に横になっていたようだ。何年ぶりかに見える川は、少し曇っている空を反射して、月の光を反射する。窓越しではなく、テレビ越しでもなく、目の前にあるそれらに胸がはねた。

頬が緩みそうになった瞬間、私の頭は冴え渡る。

生まれたのは疑問。

(どうして私は生きてるんだ?)

自分の土と草の着いた手を見つめて、生きていることが分かった。開いて閉じてを繰り返す手は何事も無かったかのように動く。一直線になったはずの心電図も、甲高い機会の音も、何も無かったように。まあ、それを望んで私は飛んだのだから、それに関してはなんとも思わないが。

ふと、顔を照らしていた光が落ちる。どうやら何かに月光が遮られたらしい。

正体を見るべく見上げれば、そこに浮かぶは空飛ぶ船。

驚いて辺りを見回せば、木造の橋や今どき珍しい古臭い家たち、さらにはもつと珍しい・・・というかテレビでしか見ないような着物や昔の髪型をした人、明らかに人間ではない者たち。

私は、見たことの無い世界に目を開く。

だが、同時に知っている世界であることにも驚いた。

「・・・銀魂だ」

あまりに小さく、誰の耳にも届かない声がついてきた。

頬をつねって見れば、当たり前前に痛みが頬から伝わってくる。それは、今私が見ているものを肯定するのと同義。今まで感じていた倦怠感も息苦しさも痛みもない。今まで腕を拘束していた点滴も、呼吸を補助する機器たちも、何もかもが外れて体が軽い。

常に体についていたアレコレが外れて開放感に満たされる。

「うわぁ・・・」

改めて自分の身なりを見て、あまりの惨状に思わず声が出た。

いつも着ていた入院着はそのまま、ありえないほどに土や草が着いていたのだ。さらに、足は何も履いておらず裸足。こちらと同じく汚れている。

とりあえず、足や手の汚れを落としたいと思ったので、久しぶりに川に入りたいと思ったこともあり、川の水で洗うことにした。草の地面から一転、砂利になったので足の裏が細かい石たちによって猛攻撃される。が、それよりも早く洗いたいという気持ちが勝り、すぐに冷たい水が足を包んだ。

―チャポン―

手と足を川につけて土と草を洗い流す。袖や裾がビツチャビツチャになったけど気にしない。たぶん気にしたら負け。

「さてとお・・・どーしましよーか・・・」

川で突っ立ったまま、濡れた手をパツパとしながら呟いた。

改めて周りを見渡すと、ゴミがかなり落ちていることが分かった。正直、綺麗にして欲しい。私みたいに川に入るヤツいるかもじゃん。ため息をついて、頭をガシガシとかく。

「・・・」

嫌な音と嫌な感触がした。いわゆるヌチャ音である。恐る恐る手を見ると、そこにあるのはべっとりとした泥。

(・・・最悪・・・)

せつかく洗った手が再び汚れた上に、洗いにくい頭にまで泥が付着

している。神よ、そんなに私が嫌いか。

「あくあ・・・」

テンションがダダ下がりである。なんかもう色々面倒になったので、川で洗うことなどせず内側から力を引つ張り出した。ラノベでいう、魔力とか霊力とか、そういうやつだと思う。転生特典として着いてきたであろうそれは、言葉とか力の流れだとか考える必要は一切なく、呼吸をするようにあつさりと思えた。

髪にまとわりついていていた重たい泥がフワリと浮いて四散する。同時に、体のあちこちに付いていたモノも取って消した。

「これで歩くわけにはいかんよなあ・・・」

汚れをとったが、入院着はさすがに目立つ。さらには裸足。目を引くどころの話ではない。

適当に服を出して、濡れないように空中に浮いて入院着と交換する。靴も靴下と一緒に歩きやすそうなスニーカーを出して、空中で装着。ゆつくりと地面に降り立った。軽い足取りで土手をのぼり、舗装されていない道に立つ。先程までいた川を振り返って、背伸びをした。

さよなら入院着。久しぶり普通の服。

世界？漫画？アニメ？を超えてたどり着いた、この世界。

すでに日は落ち、するべきことはなくなった。はてさて、一文無しで放り出されたわけだが、どうしようか。

「オイ、んなとこで何してんだ」

背後から声があった。聞いたことがある声。ただし、私にとってそれは画面やスピーカー越しに聞くのが当たり前だったもの。

振り返って目に入ったのは、黒い制服と腰の刀。口にくわえた煙草は彼の特徴の一つだろう。その先の灯りから煙が揺らめき、顔を僅かに照らしていた。おそらく彼は、ひじかたとうしろう土方十四郎。

そのV字前髪を見た瞬間、私は――

「少し、川を見たくなくなったものですから」

——笑顔を貼り付けた。

我ながら馬鹿な言い訳だと思う。日が落ちた時間帯に川が見たくなつたとか・・・どこのクソガキだ。いや、実際未成年だけでも。

それにしたって酷い。酷すぎるぞ私よ。情緒不安定の厨二か。こんなんで武装警察の副長を騙せるわけが・・・

「・・・そうか」

騙せたよ。

いいのか鬼の副長。それでいいのか。

深く聞かれたら困るけども、私としては嬉しいけども。それでも何か心配になってきたぞ。

「ガキがうろついていい時間じゃねえんだ、帰れ」

フウと煙を吐いて歩き出す。すれ違う時に煙の匂いが鼻をかすめた。

まあ、この世界において誕生したてのモブキャラに、主要キャラが深く関わるはずはない。彼らの隣に私はいないし、彼らの最後にも私はいない。それでいいのだから。

ホツとして、胸を撫で下ろした・・・はずだった。

——バツ——

「っ!？」

視線をそらそうとした黒い背中が、いきなり横に飛び退いた。瞬間、目に入ったのは大きな弾丸。土方さんが飛び退いて崩れた体制のまま何かを叫んでいる。根が優しいあの人のことだ、避けろとか伏せろとか、そんなところだろう。

が、私は少し目を見開き、首を傾げて避けただけ。顔の左側をものすごいスピードで通り過ぎ、時間差で後ろから爆音が鳴り響いた。

(・・・)

咄嗟に反射神経と回避能力を底上げしなかったら、どうなっていたことか。

煙草とは違う煙の匂いと焦げた匂いが鼻まで届き、パラパラと砂利が宙を舞う。振り返れば、アレの被害にあった可哀想な地面があった。慈悲もなく焼けて黒焦げだ。

「・・・ハハ」

そんな惨状を見て、私は思わず苦笑い。かなり頬が引きつっている。というかピクピク痙攣している。コレの犯人を100%当てられる自分が嫌になってきた。

「土方さーん、生きてやすかイ」

向こう側から歩いてきた栗色の髪のバズーカを構えた男。その甘い顔とは裏腹にドス黒いドS精神を持った、サディスティック星の皇子こと、真選組 一番隊隊長 沖田総悟。おきた そうご

自分の行いで一般市民（仮）の命が危ぶまれたというのに、悪びれるでもなく悠々と歩いて姿を現した。

いきなりの展開に驚いていると、土方さんと目が合った。

・・・合ってしまった。

先程まで興味の欠片も示さなかった顔は、ニヤリと獲物を見つけた獣のごとく笑った。

「・・・え・・・」

「今回だけは許してやる、総悟」

ゆっくりと足を踏み出し、こちらへ歩み寄ってくる。

ソウデスヨネ、コウナリマスヨネ。

避けれるはずないもんねえ、さつきみたいなバズーカ。一般市民が避けれるはずないもんねえ。

目の前にいるのはれっきとした警察であり、その警察の仕事は不穏分子を探して逮捕すること。そのための見回りをしていて、その中で避けれるはずのないバズーカを何故か避けれる謎の女が現れたら、そりゃあ獲物ですわな。さつき苦し紛れすぎる言い訳したから、余計に怪しまれてるだろうしな。でもさーあ、普通、避けれたら避けるよね？痛い思いしたくないよね？疑われたくなかったら当たれってか、捕まりたくなかったら死ねってか。オイ、神様殺すぞ。

「何モンだ、テメー・・・」

自分にバズーカを打った沖田さんには目もくれず、私の方へと来る土方さん。短くなった煙草を足で揉み消して、瞳孔をかつ開いている。私は崩れていた笑顔をまた貼り付けた。

「ただの一般市民ですよ」

「ほお。なら、住所言えるよな？俺がキツチリ身元確認してやるよ」
えく。いや、言える、言えますけど。私の住所、この世界にはないんじゃないかな？というか無いです。そもそも戸籍もないと思います。

なんて言えるはずもない。

「実は最近、ここらで攘夷浪士を見たっつー通報があつてなあ。見
回つてたんだが・・・ご同行願おうか、お嬢さん」

刀を抜いて、私に構える。え、問答無用？丸腰の女相手に？明らかに未成年なのに？というか、私が攘夷浪士だと思つてんのかよ。メン
ド。

「えーと、少しお話しませんか？何か誤解してらっしやるようですし」

「話は全部、屯所でな」

両手を前でヒラヒラさせて敵意がないことを示すが、聞く耳持た
ず。

屯所に行くのが嫌だから話をしようつて言つてるのに。そんな
だからマヨラーなんだよ。万年V字が。

口には出せない文句を心で呟き、逃げようと後ずさる。しかし、す
ぐに逃げようとした場所に刀が振り下ろされた。明らかに今いる位
置も巻き込む太刀筋。私は横に飛んで避ける。弾けた土やら石やら
が、顔と手足に当たる。痛いんだけど、地味に。

「何すんですか！一般市民だつてんじやん！少し動けるだけの一
般市民だつてーの!!」

「嘘つけ！一般市民が今の避けれるわけねえだろ!!」

「斬られろつてか！一般市民ならぶつた斬られろつてか！つーか斬つ
て確認しようとするなや！」

つーか本当に一般市民（仮）なんだつて！反射神経とか回避能力と
か、その他諸々を底上げしてるだけの一般市民（仮）なんだつて！説
明できない叫びを堪える。

土方さんの刀をもう一度飛んで避け、片手と両足で着地する。距離
を取るため後退しようとした時、背中に微かな悪寒が走った。咄嗟に

横へジャンピング前転をする。

「いつまでチンタラやってんでさア」

風を切る音と声を追って視線をあげると、後ろで爆発が起きた。もちろん、さつきまで私がいいた場所である。

幸か不幸か、爆発のおかげで土煙が辺りにたちこめた。土方さんも巻き込まれたようで、何かを沖田さんに叫んでいる様子。

私はこれ幸いと、空間を繋げて逃げた。一瞬、周りが白に包まれ、その次の瞬間には何処かの木の上に座っていた。

なにぶん初めてのことなので、適当に繋げてしまった。あの状況だったのだから、逃げれば、よく頑張りました。くらいのハンコは貰える。うん、私、よく頑張りました。

太い木の枝をまたぐように座り直して、足をぶらつかせる。背を幹に着けて上を見上げて、枝や葉に隠れて空は見えない。僅かな隙間から月光がチラつくばかりだ。

落ちて着いてきたからだろうか。今更ながらに体が震え出した。

今まで向けられた敵意よりもはるかに強い殺意、ギラギラと月の光に反射する刀、自分を睨みつける目。

木に触れる右手がガタガタと震え、木の感触すら感じられない。それを止めようと左手を出す、こちらは無様に震えてしまっている。痛いほどに脈打つ心臓、まともに空気を取り込めない肺。

浅い呼吸を繰り返しながら、必死に酸素を取り込む。

せつかく丈夫な体になったのに、恐怖で過呼吸とか笑えない。やつと好きに生きられるのに。

そう思ったら、自然と呼吸は落ち着いてきた。落ち着いて改めて感じる、体の身軽さ。そう、私を縛り付けるものはもう無い。生きるも死ぬも私次第。誰を守ろうが、誰を助けようが、私の好きにできるのだ。それが善なるものでなかったとしても。

(自由、か・・・)

焦がれていたものが手に入り、嬉しいはずなのに、その響きはどうにも寂しく思えるのはどうしてだろうか。

直ぐに忘れる疑問を最後に、私の意識は夢へと移行された。

第二空

「あーもーっ！メンドクさっ！」

既に何度目か——もはや数えるのもメンドクサクになりつつある”転移”を終え、廃屋の屋根で地団駄を踏む。あの一件から三日経つが、どうにも私は真選組に目をつけられてしまったらしいのだ。というのも《せつかく転生したのだから聖地巡礼してみようの旅》に出ていた私。その行く先々で真選組と出くわし、その度に追いかけて回されるのだ。今回も、銀さんが爆弾を空にぶん投げて処理した『HOTEL I K E D A Y A』を見ようと歩いていたら、お決まりのごとく真選組に見つかってしまったのである。慌てて路地裏に入り込み、転移して現在。

いや〜タイムイズマネーとはよく言ったものだ。この三日で色々な所を見れたのだ。恒道館道場や戌威星大使館、銀さんたちが散歩に行く公園に真選組屯所も。さすがに屯所はキツかった。逃げるの結構苦労した。でも、アニメや漫画で見るとは違う、何らかの感動を得られたのだから、安いものだと思う。

が、いちいち路地裏に飛び込んで”転移”するのは、大変とてもかなりそれはもうメンドクサイのだ。目の前で転移することは不可能ではないが、見られるとさらに面倒事になるのは明白。かと言って、足だけで逃げる技術などありはしない。身体能力を底上げすれば、それはそれでメンドクサイ。

さて、どうしたものかと首を捻っていると——

—バサッ—

頭の上を鳥が通過して行った。大きな鳥だ。力強い翼に、生きる意志に満ちた眼光。自分の体よりも何十何百何千倍も大きな空を二つの羽で飛んでいる。自由に。

そのとき、ふと思いついた。

私は片腕を胸の辺りまで上げて、一羽の鳥を作り出した。白くて綺

麗な一羽の鳥を。それを私の上を飛ぶように飛ばす。

いわゆる見張りだ。私の目と耳を持たせたので、それらの共有はいつでも出来る。

さて、これで安心して観光できる。でも、どこへ行くのか。唯一行っていないのは、万事屋くらいだろうか。幸い一度も万事屋一行とは会っていない。この世界の中心で主人公である彼らには、接触しない方がいいのだ。眺めているのが一番幸せな筈だ。

行くあてもなくなり、廃屋の屋根に座り込んで、足を放り出してブラブラさせる。空を見上げると私の鳥が白い翼で風をきつて飛んでいるのが見える。雲がいくつか浮かんだ、青。綺麗なグラデーシヨンがかつた空。唐突に、歌が頭をよぎる。何とは言わない。

「♪青ぞーらに憧れて——」

風がふきぬける中で、思いつく銀魂の曲を歌った。ボーカロイドもアニソンも、私が好きだった曲を歌った。割と大きな声で。

「喉、乾いた・・・」

歌いすぎた。喉がとてつもなく乾いてしまった。

飲み物を飲みたい衝動にかられ、ジーパンの後ろのポケットから財布を取り出す。え、何で財布と金を持ってんのかって？そりやアンタ、金なきや暮らせないでしょう。だ・か・ら、土方 and 沖田遭遇の翌日に、適当に物を創って質屋で売ってきたのだ。あまり高価すぎると怪しまれるから、買い取ってもらえそうな物を創って。財布を開けて中を覗けば、福沢諭吉が二名と野口英世が三名、小銭が十円三枚と一円四枚。あれ、自販機行けなくね？小銭無さすぎじゃね？

小銭の圧倒的少なさに驚き、落胆する。仕方ないコンビニ行くか、と廃屋の屋根からトンツと軽やかに飛び降りた。

そう、この時私はあまりに喉が乾いていたがために忘れていたのだ。自販機でも札が使えるということ。

ピンポンピンポーンと客来店の知らせが鳴り響く。目だけを回して中を見渡せば、客たちの服装以外は何ら変わらない普通のコンビニである。ジャンプを立ち読みしている和服の少年らの後ろを通り過ぎ、レジとは反対側に並ぶドリンクコーナーへ向かう。冷やすために閉められているガラス戸を引くと、ヒヤリとした冷気が流れ出てきた。適当に一本お茶をとって、ついでに小腹がすいていたのでおにぎりも手に取ってレジに向かった。

「合計275円になります」

悲しきかな、一円玉は消費できなかった。また次の機会にしよう。千円札を出して、袋に詰めてもらった。こっちでは袋は有料ではないらしい。

自動ドアをくぐって、歩き始める。ガサゴソと袋をあさって、買ったばかりで水滴まみれのお茶を取り出す。歩きのみは行儀が悪いと分かっているが、誰に見られる訳でもない。皆、前を向いて気にとめずに通り過ぎていく。ペットボトルの蓋を開けて傾け、ようやくと水分を口に含む。我ながらここまでよく耐えた。

ペットボトルの蓋を閉めて、周りをそれとなく見回してみる。なんてことは無い。普通の街だ。子供が母と手を繋ぎ、会社員が電話で話しながら急いで歩いていく。私の現代とほとんど変わらない。変わっているのは、コンビニの客同じで服装くらいなもの。そんな中で洋服を着ている私は、少し目立ってしまっているのかもしれない。

まあ、私には関係ない。

行くあてもないので、目についた公園のベンチに座っておにぎりのラッピングを外した。中身は鮭だ。梅と迷ったけど、まあなんとなくこっちにした。理由はない。

空の雲を眺めながら食べていると、不意に膝に重さを感じた。

「にゃあ」

白い毛並みが綺麗な猫が私の膝に乗っていた。首に鈴がついた首輪をしているところを見るに飼い猫だろう。行儀よく座る猫の金色の目は、真つ直ぐ私のおにぎりに向いていた。

「なあに、お腹すいてんの？」

「なあう・・・」

「そつかあ。じゃあ、ほらやるよ」

おにぎりの鮭を取り出して、差し出してみた。予想通り腹が空いていたらしく、白猫はすぐに食べ始めた。

「お前どこの子なの？ご主人心配してんじやない？」

米の方も何回かに分けて差し出せば、ガツガツと食べる。私の分はなくなるが、まあ、後で買い直そう。

食べ終わると、眠くなったのかそのまんま私の膝の上で丸くなって寝始めた。私はお前の座布団でもベットでもないんだが？

にしても、どうしたものだろうか。このままここにずっと座ったままだと真選組に見つかってしまうかもしれない。かと言って猫を起こすのも気が引ける。白い毛並みを撫でながら頭をひねらせて考えていると、耳にある声が入ってきた。

「絶対こつちアル！定春の鼻に間違いはないネ！」

「神楽、お前それ今日何回目だよ。もう銀さんクタクタなんだけど？」

「まあまあ銀さん、定春の鼻がいいのは事実でしょ。それに猫の行動って読めないから、案外近くににいるかもしれないよ」

「そうネー・猫の気分と乙女の心は変わりやすいアル」

「おまつ、猫と乙女を比べんじやねえよ！猫の気分の移りの方がまだ可愛げあんだろオが！」

世界で一番聞きたくなくて、宇宙で一番聞きたかった声。明るい女の子と真面目な少年と気だるげな男性の声。そこに少し大きめな犬の鳴き声も加わっているの、もはやオールスター。

そんな世界の中心核四名様のお声が、公園の入口の方から聞こえた。目だけをそちらに向けるとあら不思議、テレビを介した二次元でしか見ることができなかつたマダオと戦闘民族と犬神とメガネがいるのではないですか。

見れたことに関しては嬉しいことこの上ないのだが、意図的に避け
ていた身としては少しモヤモヤする所存。

(というか、え、ちょっと待って・・・今猫って言った?)

私としては心当たりがありまくり、というか心当たりを現在進行形
で撫でております。スヤスヤとこちらの気も知らずに寝てやがりま
す。

(お、お前・・・！脱走したのか!?)

起こして去るべきだった、と後悔するには遅すぎる。私の頭は素早
く思考を切りかえた。

作戦①：逃げる

一番取りたい選択肢。だが、怪しまれてしまう上に、下手に騒ぎを
起こして真選組に見つかつたりすれば面倒だ。

作戦②：猫を起こして逃げさせる

猫が私の元から去れば、彼らは私に用はないはずだ。よって、接触
は避けられる。が、情報収集として話しかけられる可能性はなくもな
い。

作戦③：モブになりきりやり過ごす

あくまでも猫がよってきただけのモブとなる。猫さえ渡せばお役
御免。が、彼らと必ず接触しなければならぬ。何より避けたい選択
肢。

作戦④：猫に自分で帰ってもらう

言わずもがな、自分でハウス。二番目に取りたい選択肢。が、これ
を選ぶと万事屋メンバーが報酬を貰える可能性が限りなく低い。彼
らの生活状況を知っている私からすれば、良心が袋叩きにされるレベ
ルで痛めつけられる。

おかわりいただけただろうか？

そう、詰みである。

私、内心ムンクで発狂。

神は力だけを与えて私を見放した。私に平和を寄越せやマイゴツド。

そうしている間にも一歩ずつ四名様は近づいてこられている。もはやこちらに目を向ければ気づかれる。

冷や汗をダラダラかきながら、猫の背を撫で続ける私。なんて健気。

そしてついに時が来る。

「あ、アレじゃないですか!？」

男の子の声はやけに大きく聞こえた。怪しまれたくないので、私はそのまま猫を撫で続ける。それに、まだこの猫と決まったわけじゃない。もしかしたら別の猫の可能性もある——

「すみません。その猫なんですけど……」

なるほど、微塵も救いはないわけか。期待するだけ無駄ってわけね。理解理解。

ハイライトをハンマー投げのごとくぶん投げようとするのを必死にこらえ、男の子の方を向いた。頼む、まだ仕事をしてくれハイライト。お前がいなくなったらコイツらに目をつけられるっ！

「ん……ああ、この子ですか？」

はい完璧な演技ですね私。いかにも今貴方の存在に気づきましたよ的な感じで顔を上げた。

(……………)

瞬間、目に映ったのは顔面国宝。

皆様、よく考えてご覧なさいな。銀魂のキャラは顔がよろしいことにご存知ですね？もちろん、銀さんも神楽ちゃんも国宝級なわけですけども。もう一度言う、よく考えてご覧なさいな。彼らのベースになっているのは？そう銀魂において欠かすことの出来ないツツコミを担当している新八である。要するに彼は、美男美女のベースというわけだ。漫画とアニメにおいて周りをはっちゃけ過ぎて気づいてないかもしれないが、彼もまた美形であることに間違いはないのだ。まして、礼儀正しく黒髪、メガネ、弟属性などなど、一定数の女の性癖に触れそうな部分も持ち合わせている。

何が言いたいかって？

(顔がいいヤツしかいねえ・・・)

人の良さそうな笑顔を浮かべる新八くん、可愛らしい顔をギラつかせながら猫を見る神楽ちゃん、心底面倒くさそうに鼻をほじる銀さん、行儀よくおすわりをして銀さんを噛む定春くん。

背後に広がりかけた宇宙を押さえ込み、口と鼻から吹き出しそうだった血を何とか飲み込んだ。

尚、顔を上げてからここまで掛かった時間は約0.8秒である。オタクの底力を舐めるなよ。

「座ってたら膝に乗って寝てしまって・・・飼い主の方ですか？」

「あ、いや、僕らその子をつまえるように頼まれてるんですよ」

「新八、まどろっこしい説明はいらないアル。さっさと連れて焼肉ネ」

神楽ちゃんがもう待てないというように、話し出した。

「焼肉？」

万事屋は基本、万年金欠である。それなのに、万事屋が焼肉だと？天変地異か、明日は雪か、いや槍か爆弾の可能性もある。

思わず首を傾げてしまった。しかし、新八くんは上手く勘違いをしてくれたらしい。

「その、僕ら万事屋っていう何でも屋をやってます。その猫を捕まえるのが今回の依頼なんです」

「なるほど、そういうことですか」

「だから、早くその猫寄越せヨ」

「そーそー。早く渡してくれない？もう銀さん疲れちったよ」

「何言ってるすか二人して！失礼でしょ！まったく・・・すみません」ペこりと頭を下げる新八くん。本当にできた子だ。私は心が癒されました。欲に忠実な二人のストッパーであるこの子の疲労は計り

知れない。知りたくもない。絶対胃に穴があく。

「構いませんよ。全部聞かなかったことにしますから」

「本っ当にすみません」

「もちろん、依頼の話もね」

「え・・・」

だから、という訳でもないが、出会えた記念だ。

ニコリと笑って言えば、悪い方向に想像したのか新八くんの顔が引き攣って青ざめる。そんな顔しなくても、私はそこまで性格は悪くない。

「依頼です、万事屋さん。私、この後用事があるんです」

もちろん嘘である。が、今日は特別だ。

「猫に膝に乗られてしまって困ってるんですよ。首輪をつけているので飼い猫だと思おうのですが・・・飼い主の所へ連れて行ってあげてくれませんか？もちろん、お代は払います」

「・・・え」

ポカンと口を開けて、私を見る三人。私はもう一度ニコリと笑い、わざとらしく口に手を当てて唸った。

「うーん・・・もしかしたら飼い主さんは遠方に住んでいる方かもしれないですね・・・移動費や昼食代も兼ねて、これくらいいいですか？」

猫を撫でている反対の手の指で、額を示した。私が曲げた指は人差し指と中指以外。

「二・・・？」

ポツリと神楽ちゃんが呟いた。どうやら頭の処理が追いついてないらしい。カクンと首を傾げるのも大変可愛らしくてグッド。

「そうです。引き受けていただけますか？」

「え、でも「もちろんアル！この神楽様に任せるネ！」ちよつと神楽ちゃん！」

神楽ちゃんは元気よく返事をして、胸を叩いて引き受けてくれた。自信満々な笑顔もとても可愛いベリーグッド。だが、新八くんは抵抗があるようだ。宥めるように神楽ちゃんの名前を呼ぶ。

「イイじゃねエか新八。本人は依頼するって言ってるんだから」

「でも・・・」

金にがめつい銀さんと、言葉に押される新八くん。後者は申し訳なさそうに私を見た。金は欲しいが負い目を感じているのだろう。

「受けていただけますか？」

「う……」

さらに私の笑顔で押し込む。あくまでも依頼主として押し付けられれば彼は断る言葉できまい、という汚い作戦である。ここまで来たらどんな手を使ってでも金をねじ込みたい。ファンの精神は限界まで行くところなるのかと実感した瞬間だ。

結果、折れたのは新八くんだった。

「わ、わかりました」

「っしやあ!!」

承諾の返事とともに、横に並ぶ二人は拳を突き上げた。猫を運ぶだけで二重で報酬が貰えるのだから、相当嬉しいのだろう。

「それじゃあ……はい、お願いします」

撫でていた手を止め、猫をそつと抱き上げる。そのまま立ち上がって、新八くんの腕へ乗せる。この間、猫は動かず黙っていた。逃げ回るのも疲れたのかもしれない。

「では、お金は貴方にお渡ししますね」

後ろのポケットから財布を取り出し、銀さんの前に。本来、彼の性格を知っていれば渡すはずない。が、私は何も知らないモブ設定である。つまり、銀さんがダメ人間だということも知らないフリをする必要があるのだ。故に、見た目は大人である銀さんが(私にとって)適任。

それプラス、新八くんだと受け取って貰えない可能性も、まだ少なからずあるにはある。なので、受け取ってくれる可能性の高い人物が理想的。

「どうぞ」

「「……は？」」

財布から福沢諭吉を二名召喚し、マスターを銀さんに変更した。

万札が二枚乗った手を見つめて、三人は再びポカンとフリーズ。よく見たら定春も口を開けて硬直している。逃げるなら今だ。

「それでは、私はこれで」

「「「……」」」

呆然としている四名の横を通り過ぎ、公園の出口へ向かった。いく

つかある出入口のうち、最も路地裏に近い所へである。

無事に公園から出て、そこからは路地裏にダツシユ。お茶入りのビール袋がガサガサ揺れて、せつかく潤った喉もカラカラに乾く。薄暗い場所へ駆け込んですぐに、私は廃墟へ飛んだ。

「やっぱり眩しいなあ」

そんな眩きは、どこかへ吹く風に掻き消されて路地裏に吸い込まれた。